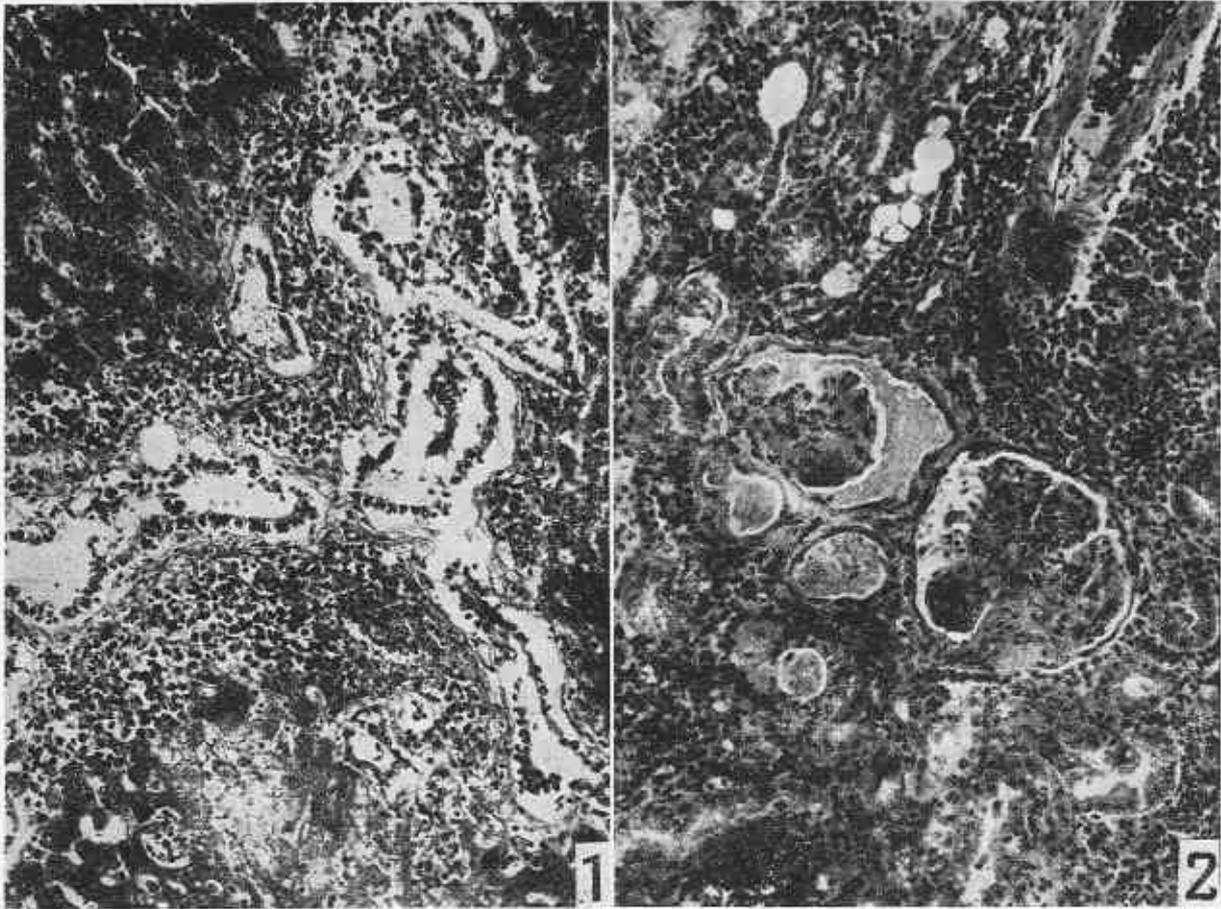


## ミンクのアリューション病

麻布獣医科大学病理学教室出題・第7回獣医病理学研修会標本 No. 93



昭和41年8月、北海道網走のミンク養殖場に飼育されていた未経産のサファイヤミンクの1例が、病性鑑定のため、当研究室に送付された。本例は、死の4日前から食欲異常が認められたというが、剖検時の詳しい記録を欠いたため、ホルマリン固定材料について肉眼的病変を検査し、さらに病理組織学的検索を行なった。

1) 肉眼的所見：肝臓は、かなり腫大し、うつ血、脆弱で、小葉像は、明瞭であつた。腎臓は、萎縮傾向を示し、多少表面不整で、三層の境界は、不明瞭、血液充盈、皮質に点状出血を認めた。脾臓は、著しく腫大しており、包膜は、緊張し、辺縁は鈍で、汙胞不明瞭、剖面貧血状であつた。肺には、粟粒大白斑散在、血液充盈を見た。心臓は著しく肥大し、左右の心室に多量の血液凝塊を含んでいた。リンパ節は、軽度の腫脹を示し、剖面は疎であつた。

2) 病理組織学的所見：肝臓にはうつ血、限局性出血、肝細胞の巣状壊死が見られ、小葉間結合織には、プラズマ細胞を含む小円形細胞の浸潤が見られ、胆管の著しい増生があり(写真1,  $\times 100$ ) 増生した胆管内に胆汁様液の貯溜が認められた。小筋型動脈壁には、硝子様物の沈着がみられた。腎臓では、間質部への細胞浸潤が著しく、多数のプラズマ細胞を含んでいた。ボウマン嚢上皮の破壊、硝子化、糸球体の充血、硝子滴の沈着、蛋白様物質の沈着があり、種々の程度の糸球体の

硝子化がみられた(写真2,  $\times 100$ )。高度のネフローゼと多数の蛋白円柱の出現があり、動脈の変化は、肝のそれに酷似していた。集合管上皮には、ラッセル小体を有するものがみられた。脾臓では、脾髄各所にプラズマ細胞を含む単核細胞の集積がみられ、汙胞の萎縮、細網細胞の増殖がみられ、核濃縮を起こした多数の巨細胞が認められた。リンパ節は、脾の変化に類似し、汙胞の萎縮、消失、単核細胞の集積、巨細胞の出現がみられた。その他、心筋内小動脈壁の肥厚、エオジン好染物質の沈着、脈管周囲結合織の増生、プラズマ細胞および好中球を含む細胞浸潤、心筋梗塞等がみられ肺は、血液充盈、脾実質内出血、十二指腸のカタルおよび粘膜下にプラズマ細胞を中心とする細胞浸潤がみられ、大動脈線維の走向不整、硝子様膨化が認められた。

本例は、最初に記したとおり斃死例である。今回はからずも同一の疾病の標本が、東京大学より提出されているが、それに比して、肝の巣状壊死、糸球体病変の高度な点など多少の差が認められる。なお、本例からは、脾臓、心臓、腸より大腸菌が分離されているとのことで、2次の感染の有無についても疑問の点がなくはないが、総括的にアリューション病による組織変化を考えると差支えないと思う。